弥生時代中期における「波状口縁」甕について

藤井　　整

1．はじめに

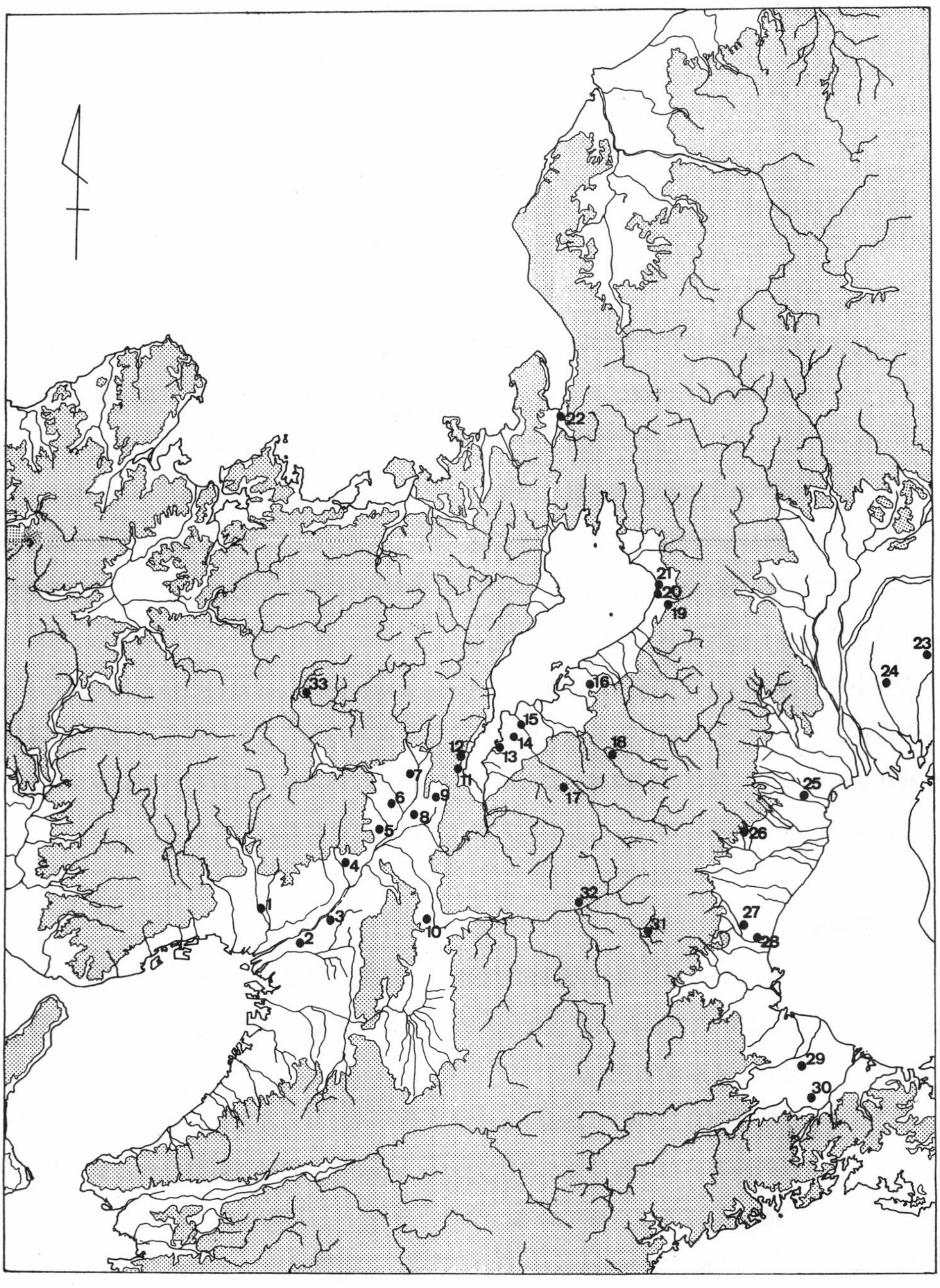
弥生時代中期前半に出現する「波状口縁甕」は60年代に佐原真氏によって「近江地方に分布の中心を持つ甕」と指摘されてから、「近江型甕」とよばれてきた。畿内第Ⅱ様式後半から出土するようになるこの甕は、近江、山城、摂津、伊賀、伊勢、尾張地方などで報告例がある。その形態的特徴が認識しやすいこともあって、この甕を軸とした地域色研究や地域間交流についての論文もいくつか発表されてきた。近年、「近江型」という呼称を改め、「近江系」と呼ばれるようにもなったが、さらにはその「近江」という地域名称も外すべきであるという指摘も出始めている。

この小論では特にこの「波状口縁甕」について集成、検討し、その中に大きく分けて4つの系統があり、その分布に小地域差があることをあきらかにする。また、「波状口縁甕」が波状を放棄して「受け口口縁甕」になるという指摘があるが、受け口への変化も各型式ごとに違った様相を示していることを明らかにすることを目的としている。

2．研究史

弥生時代中期前半に山城と近江周辺に分布する「波状口縁甕」は1966年に『弥生式土器集成』「琵琶湖地方」で佐原真氏が「近江地方に分布の中心を持つ」甕であると指摘してから「近江型甕」とよばれてきた。(注1)

佐原氏は「琵琶湖地方」の中で、近江における甕をAとBの２者に分類している。甕形土器Aは「口縁内面のハケ工具による波状文」と「口縁部外端(口縁端面)の２個１対の押圧文」などが特徴としてあげられている。甕形土器Bは「口縁端面が直立していること」「口縁端面のハケがつねに横方向となっていること」が特徴としてあげられている。甕形土器Aはいわゆる「大和型甕」の一種で、甕形土器Bはいわゆる「近江型甕」である。佐原氏のこの指摘を基礎として「近江型甕」は定義された。その後、近江、山城両地域で発掘調査がすすみ、「近江型甕」はその特徴が認識し易かったことも手伝って、資料の増加にともないいくつかの論文が発表された。(注2)



第１図　「波状口縁甕」出土遺跡

1.田能　2.森小路　3.高宮八丁　4.天神　5.神足　6.中久世　7.長刀鉾町　8.深草
9.中臣　10.畑ノ前　11.錦織　12.穴太　13.烏丸崎　14.寺中　15.服部　16.小川
17.堤ヶ谷　18.市子　19.立花　20.宇賀野墓町　21.塚町　22.吉河　23.朝日
24.阿弥陀寺　25.永井　26.東庄内Ｂ　27.亀井　28.納所　29.金剛坂　30.上地山　31.北切
32.宮ノ越　33.塔

福岡澄男氏は佐原氏が甕Ｂとしたものの中に第Ⅲ様式に下るものがあることを指摘した。また、甕Ｂは甕Ａの系譜上で理解できることも示し、その成立についても論じられるようになった。(注3)

1985年には浜崎悟司氏が「甕型土器Ａ」の２つの特徴である「口縁内面のハケ工具による波状文」と「口縁部外端(口縁端面)の２個１対の押圧文」が近江に限らない広い範囲で確認できることを指摘してこれを「近江系」として分離、「近江型甕」の定義をより明確なものとした。(注4) これによって地域間交流を考える上で「近江」に限定せずに論議する方向性が示された。

國下多美樹氏も山城における中期から後期にかけての「近江型甕」についてまとめた。特に中期の甕について型式分類を行なったさいに、波状口縁甕から山形口縁甕へと変化するという考え方も示した。(注5)

石黒立人氏はこうした研究の動向の中で、「近江型」あるいは「近江系」という呼称そのものについて疑問を投げかけた。(注6) 石黒氏は東海にも「波状口縁甕」が分布することを指摘し、浜崎氏が「近江系」を分離したことについては評価しつつも、「近江型」の特徴として残された諸要素すらも本当に「近江」を規定するものなのかという問題を提起した。また、これまでの地域色研究が甕に偏っていたことを批判し、壺形土器をも含めた形でいわゆる「近江型」と呼ばれてきた一群を理解しようとした。(注7) 石黒氏はある特定の土器型式の背後には、特定の遺跡が存在するという考え方をもっていわゆる「近江型」を分析し、この個性の際だつ「近江型」の分布を「鈴鹿・信楽山系」に求めた。

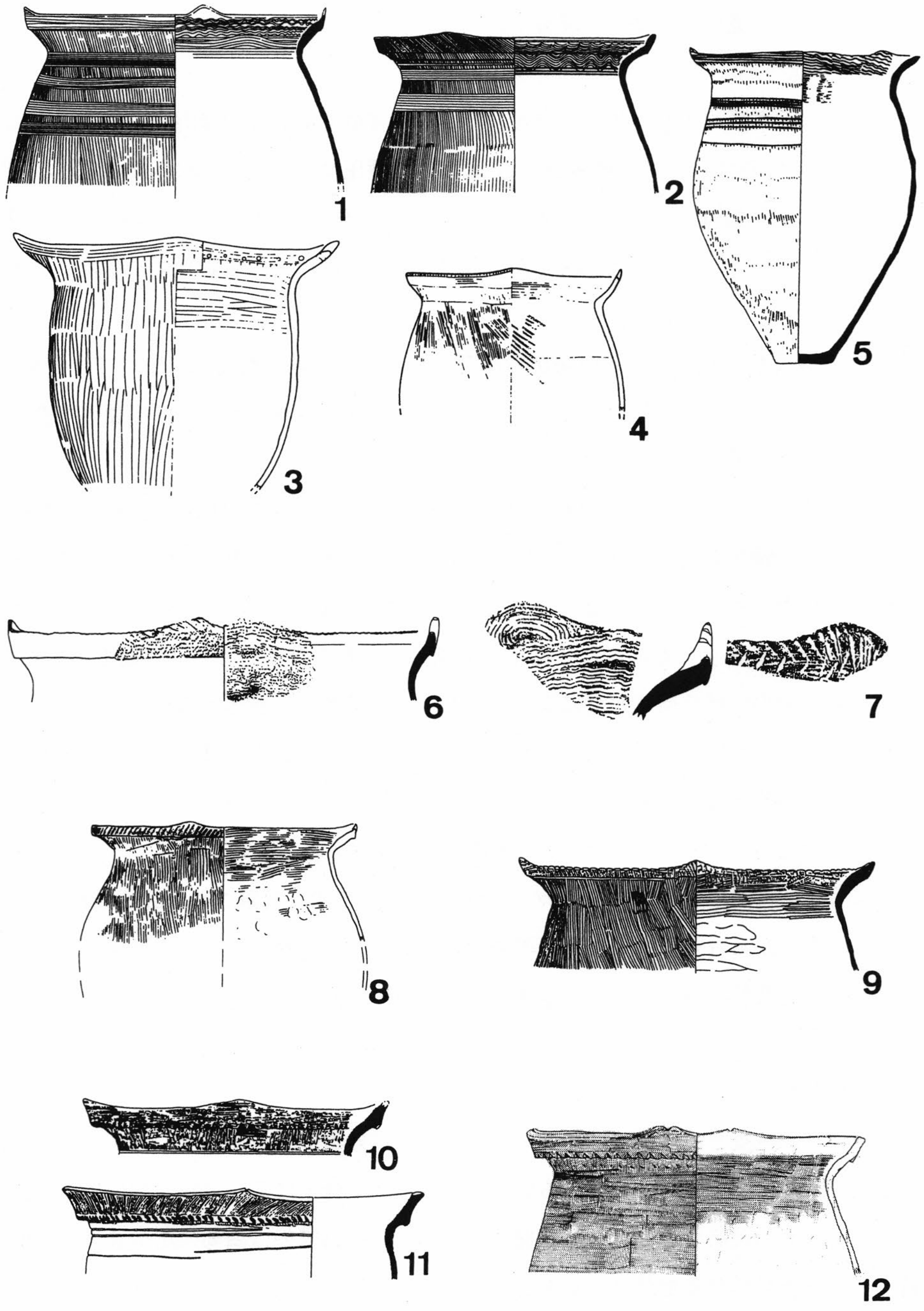
このように、「波状口縁甕」は当初から近江との関係の中で理解され、評価されてきた。近年「近江型」から「近江系」へとその表現は変わってきたが、ここで「近江」という単語から離れて「波状口縁甕」として整理してみたい。

３．型式分類

以下に波状口縁甕を口縁部の形態から４つの型式に分類する。

Ａ型式：口縁端面をヨコハケ、あるいはナナメハケで仕上げる。端部の刻目には有無があるが、刻むものは必ず上端部か波状部分のみを刻む。口縁部は頸部に比べればやや厚みを持ち、外上方にのびる形態となるが、このときに粘土帯を貼り足したりはしない。この型式は端面がほとんど屈曲せずにまっすぐのびるものから、徐々に端面のハケが発達して口縁部が立ち上がるものへと変化する。口縁内面は加飾されるものが大半であるが、紋様は体部を調整したハケ工具を用いた波状紋(以下「ハケ波状紋」)に限られる。

Ｂ型式：口縁端面をヨコハケで仕上げた後に同じハケ工具で刺突列点紋を施す(以下



第２図　「波状口縁甕」の各型式

A型式：１.中久世ＳK20　　２.中久世ＳD02　　３.中臣　　４.長刀鉾町　　５.立花

B型式：６・７.穴太ＳK04

C型式：８.高宮八丁ＳK122　　９.森小路

D型式：10・11.納所　　12.阿弥陀寺

「ハケ刺突列点紋」)。このハケ刺突列点紋は羽状に施紋され、口縁端面が拡張するのにあわせて単位が増加する。口縁端面の成形もＡ型式と異なり、粘土帯を貼り足して波状部分と口縁端面の全体を作り出す。このためつくりは重厚で、立ち上がりも強くなる。このことから、型式学的にはＡ型式よりも若干遅れて成立するものと考えられる。Ａ型式と同じく端部の刻目には有無があるが、刻むものは必ず上端部か波状部分のみを刻む。口縁内面はＡ型式と同じくハケ波状紋で加飾されることが多いが、ハケ刺突列点紋や、ハケ円形紋などもみられ、加飾率はＢ型式のほうが高い。

Ｃ型式：Ｂ型式と口縁部の処理は共通するが、貼り足されるのは波状部分のみとなる。口縁部は肥厚するが、立ち上がりは強いとはいえず、むしろコブ状突起をもつものに近い。口縁端面の紋様はハケ刺突列点紋のものが多く、口縁内面はハケ波状紋以外の紋様は採用されない。

Ｄ型式：伊勢地域在地の甕の口縁部を波状にしたもの。口縁部の立ち上がりは非常に強く、内方向に傾斜する口縁のものも散見される。口縁端面はヨコハケで仕上げるもの、櫛描で波状紋を施紋するもの、ハケ工具による刺突列点紋をもつものなどバラエティがある。口縁端部の刻目には有無があるが、在地の甕の傾向にそって下端部を刻むか波状部分のみを刻むものが目立つ。口縁内面の処理はナデで無紋かハケ波状紋である。

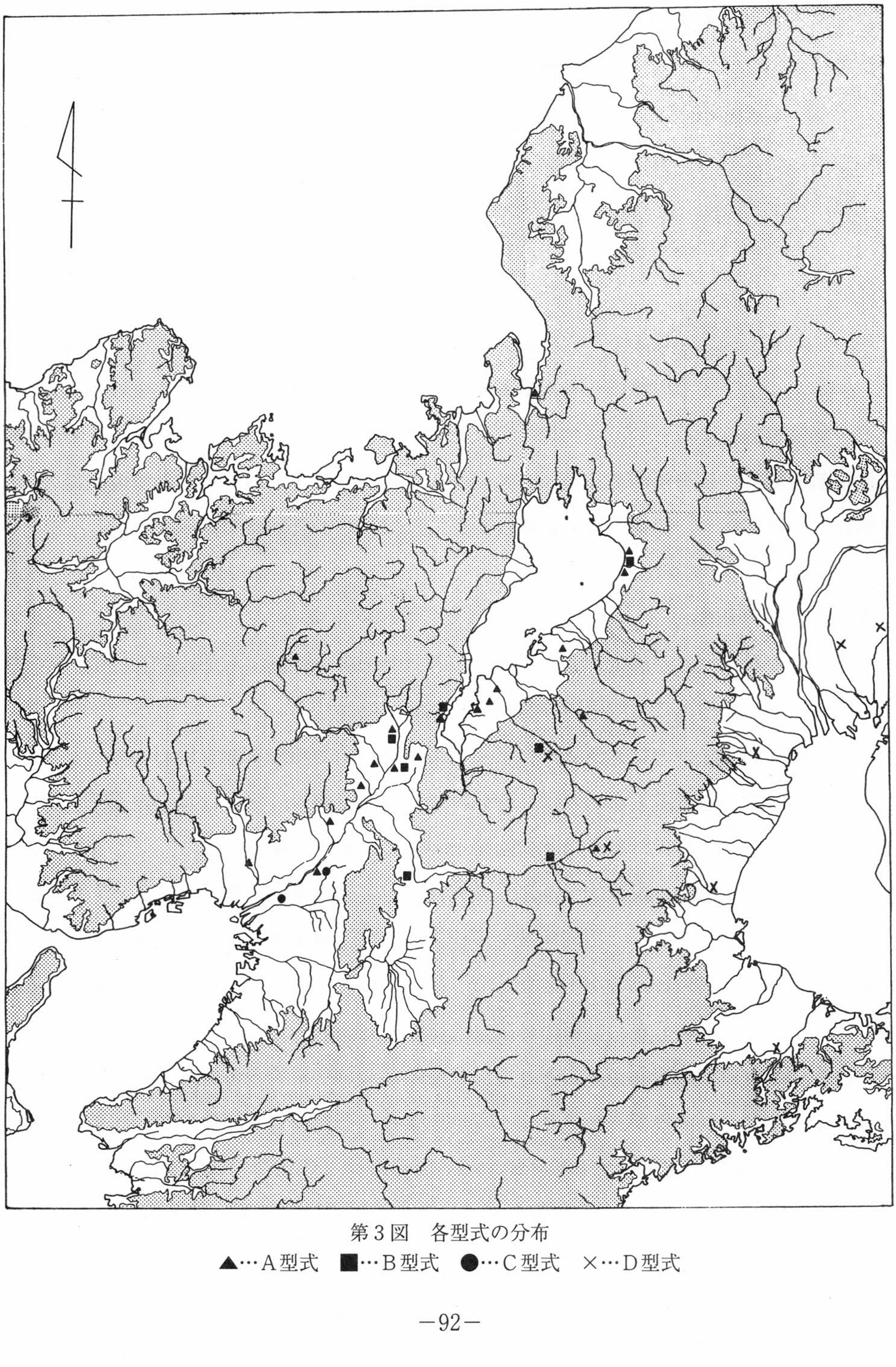
４．各型式の分布

以上のような４型式が設定できると考えられ、その分布範囲にもそれぞれに偏りが認められる。以下、各型式ごとにその分布地域について検討したい。

最も分布範囲が広いのはＡ型式で、近江地域南部、山城地域東部を中心に分布する。１点でも出土している遺跡も含めれば、その北限は吉河遺跡で、南限は森小路遺跡、西は田能遺跡でも出土しており、東では北切遺跡と非常に広範囲で確認できる[注8]。しかし、まとまった量が出土する遺跡は限定的で近江地域南部、山城地域東部に限られ、これらの地域に分布の中心がある。ただし、山城地域でも桂川右岸の拠点集落である神足遺跡や鶏冠井遺跡では全くといっていいほど出土しないし、近江地域でも湖西北部の針江南遺跡では出土していないなど、その分布には極めて限定的な様相が認められる。

Ｂ型式はさらに分布範囲が限定される。分布の北限は宇賀野墓町遺跡であるが、１点しか出土していない[注9]。この型式がまとまって出土することはほとんどないが、比較的まとまって出土するのは穴太遺跡、深草遺跡、畑ノ前遺跡などの遺跡である。この分布範囲は「鈴鹿・信楽山地」を囲むような位置にあり、石黒氏のいう「鈴鹿・信楽山地周辺の土器」にあたるものになるだろう。

Ｃ型式は淀川水系でも下流に分布するが、型式分類の項目でも触れたように、波状部分の成形はかつて「山形状口縁甕」と呼ばれたものと同一であり、そのありかたも周辺的である。今回は「山形状口縁甕」について詳述することを避けたが、それらの分布は高宮八



第３図　各型式の分布
▲…Ａ型式　■…Ｂ型式　●…Ｃ型式　×…Ｄ型式

丁遺跡、鶏冠井遺跡、横山遺跡、東庄内Ｂ遺跡など、「波状口縁甕」の分布の縁辺部に集中している。このＣ型式はそういう位置づけにある。

Ｄ型式は主に伊勢地域全域に分布する。阿弥陀寺遺跡、朝日遺跡から金剛坂遺跡、上地山遺跡にかけての地域以外では北切遺跡、堤ヶ谷遺跡などの山間部でも出土している。

５．波状口縁甕の動向

次にその出現時期を考えてみたい。Ａ型式は主に近江地域南部、山城地域東部を中心に分布するが、明確な遺構にともなうものは極端に少ない。京都市中久世遺跡ＳＫ20の資料は第Ⅱ様式後半から末葉の資料であるが、(１)のように口縁部の立ち上がりはかなり強い。同じく近江地域でもこの時期よりさかのぼる確実な資料はなく、現時点では遺構にともなうＡ型式は第Ⅱ様式末葉にならなければ確認できない。しかし、口縁部の立ち上がりが弱く、口縁部の厚みが薄いといった型式学的に古く位置づけられるものも大津市錦織遺跡などで散見されることから、この型式の出現は少なくとも第Ⅱ様式後半の内にあるものと考えられる。

さて、これらの波状口縁甕についてはこれまで第Ⅲ様式後半以降は波状部分を失って平縁となり、受け口口縁甕へと変遷していくものと理解されてきた。今回、口縁部を４型式に分類したもののうち、受け口口縁甕へと発展するのはＡ型式のみである。Ａ型式は第Ⅱ様式後半から第Ⅲ様式前半にかけて近江南部、山城東部を中心に分布するが、第Ⅲ様式後半以降は波状部分を失い、受け口口縁甕となる。ただし、市子遺跡、北切遺跡などでは第Ⅲ様式後半にも散見され、地域的にはＡ型式がこの時期まで残存するようである。

Ｂ型式の分布範囲は非常に限定的で、近江南部の穴太遺跡、山城東部の深草遺跡、同南部の畑ノ前遺跡などで出土が確認されている。いずれも第Ⅱ様式末葉から第Ⅲ様式前半にかけての時期の資料であるが、どの遺跡でも主体となる型式とはならない。

このＢ型式が出土する遺跡はいずれも信楽、鈴鹿山地の周辺に分布していることが注意される。このときＢ型式の分布する各遺跡においてＢ型式の口縁外面とモチーフを共通する壺形土器が散見される。この袋状口縁壺はいずれも非常に加飾率が高く、その紋様のモチーフもＢ型式のものと共通する。伊賀地域の宮ノ越遺跡では、この型式の壺が報告されている。これらは第Ⅲ様式前半に位置づけられるものであり、山城地域南部の畑ノ前遺跡でＢ型式が出土する時期と併行し、この地域がＢ型式の成立に関わっている可能性は高いといえよう。

このＡ、Ｂ両型式は第Ⅲ様式前半の間に姿を消すが、Ｄ型式は第Ⅲ様式前半以降、第Ⅳ様式まで「波状口縁甕」として残存する。そしてその分布範囲はそれまでのＡ・Ｂ型式が

近江、山城を中心としていたのに対して、Ｄ型式は、その分布範囲を伊勢地域へと移していく。このＤ型式の成立についてはＢ型式との間を埋める直接的な資料がないが、Ｄ型式が分布する地域には第Ⅲ様式前半以降、Ｂ型式と紋様モチーフを共通する袋状口縁壺が出土する。北切遺跡などでみられるＤ型式の口縁外面のモチーフは明らかにＢ型式のものと同一の系譜で理解できることからも、Ｂ型式とＤ型式は無関係ではありえない。

６．まとめ

これまで「近江型甕」とよばれ、地域間交流などを論じられることの多かった「波状口縁甕」について考えてみた。ここでは波状口縁４型式の間には分布に差が認められることが明らかにできた。

Ａ型式は第Ⅱ様式後半に成立し、近江南部と山城東部を中心に西摂から若狭にかけて分布する。この型式は第Ⅲ様式後半には波状部分を失って受け口傾向を強める。Ｂ型式はそれより若干遅れて第Ⅱ様式末葉から第Ⅲ様式前半にかけて、近江南部と山城東部の「鈴鹿信楽山地周辺」に分布する。これらの地域では第Ⅲ様式前半には波状口縁は姿を消すが伊賀地域や伊勢地域ではこの時期から波状口縁Ｄ型式が分布し始め、第Ⅳ様式併行期にまで分布している。このＢ型式とＤ型式はそのモチーフから伊賀地域を介して関係をもっていると考えられるが、現時点では山城南部、伊賀などの地域の様相が明らかでない。

その分布からは、これらを一括して「近江」と冠して呼ぶべきものではないことも指摘できる。今回は事実関係の整理のみでこの甕の成立や祖型、波状口縁となる要因については触れることができなかった。今後の課題としたい。

日頃から岡崎晋明先生、豆谷和之氏をはじめ京都弥生文化談話会の諸兄にはご指導いただいている。特に小文をまとめるにあたって石黒立人、國下多美樹、小竹森直子諸氏にはさまざまなご教示をいただいた。筆者の不足によってご教示を反映できたとはいいがたいがここに記して感謝したい。

（ふじい・ひとし＝兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）

注１　佐原　真　1960　「先史時代」『彦根市史』
　　佐原　真　1966　「琵琶湖地方」『弥生式土器集成　本編二』日本考古学協会・弥生式土器文化総合研究特別委員会

注２　井藤　暁子　1982　「甕の地域性」『考古学ジャーナル』202号
　　國下多美樹　1986　「近江型甕についての一試論　－弥生時代中期～後期の山城と近江の交流関係－」『長岡京古文化論叢』同朋舎

注３　福岡澄男　1973　「中期甕形土器一類型」『湖西線関係遺跡発掘調査報告書』

注４　浜崎　悟司　1985　「弥生土器甕にみられる地域色－山城～近江地方弥生時代中期前半の甕－」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要』１　(財)滋賀県埋蔵文化財センター

注５　國下多美樹　1989　「近江系土器について」『京都府弥生土器集成』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注６　石黒　立人　1992　「鈴鹿・信楽山地周辺の土器」－イメージとしての山－　『古代文化』第44巻８号　(財)古代学協会

注７　石黒　立人　1994　「「鈴鹿・信楽山地周辺の土器」を考える」『考古学フォーラム』４　考古学フォーラム

注８　京都府京北町の塔遺跡平成７年度試掘調査をおこなった福島氏から波状口縁甕Ａが出土しているということをご教示いただいている。第Ⅲ様式前半の資料と考えられる。

注９　兼康　保明　1990　「近江地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ　木耳社

－遺跡報告書－

－近江－

穴太遺跡　1994　『一般国道161号線(西大津バイパス)建設に伴う　穴太遺跡発掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

市子遺跡　1988　『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸＶ－３』　滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

宇賀野墓町遺跡　1985　『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＸⅡ－６』　滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

小川遺跡　1980　『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ＶⅡ－５』　滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

烏丸崎遺跡　1989　伊庭　功「烏丸崎遺跡出土の弥生中期の土器について」『滋賀考古』創刊号　滋賀考古学研究会

立花遺跡　1988　『米原町埋蔵文化財調査報告Ｘ　立花遺跡発掘調査報告書』　米原町教育委員会

塚町遺跡　1995　『地福寺遺跡・塚町遺跡発掘調査報告書』　長浜市教育委員会

堤ヶ谷遺跡　1982　岩崎　直也「湖東における高地性集落の調査」『滋賀県文化財だより』No.68　(財)滋賀県文化財保護協会

錦織遺跡　1990　『錦織・南滋賀遺跡近江国庁跡発掘調査概要Ⅳ』　滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

服部遺跡　1986　『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』－滋賀県守山市服部町所在－　滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

－山城－

鶏冠井遺跡　1984　「長岡京跡左京第100次(7ANEHD地区)～左京二条三坊一町鶏冠井遺跡３次～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第11集　向日市教育委員会

神足遺跡　1980　「長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概要長岡京右京第10・28次調査(７

ANMMB地区)」『長岡京市文化財調査報告書』第５冊　長岡京市教育委員会

中久世遺跡　1992　「Ⅶ中久世遺跡(91ＭＫ142)」『京都市内遺跡立会調査概報　平成３年度』　京都市文化観光局

長刀鉾町遺跡　1984　『平安京左京四条三坊十三町－長刀鉾町遺跡－』＜平安京跡研究調査報告書第11輯　(財)古代学協会

畑ノ前遺跡　1987　『京都府(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書』－煤谷川窯址・畑ノ前遺跡－　(財)古代学協会

深草遺跡　1966　「深草遺跡発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報1966』　京都府教育委員会

1974　林　和広「深草遺跡出土の弥生式土器」『埋蔵文化財発掘調査概報1974』　京都府教育委員会

－摂津－

高宮八丁遺跡　1992　『高宮八丁遺跡Ⅱ』－第２次および第３次発掘調査概要報告書－　寝屋川市教育委員会

田能遺跡　1982　『田能遺跡発掘調査報告書』15　尼崎市教育委員会

－伊勢－

上地山遺跡　1985　『上地山遺跡発掘調査報告書』　玉城町教育委員会

北切遺跡　1984　「北切遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財報告書』　三重県教育委員会

1994　石黒　立人「「鈴鹿・信楽山地周辺の土器」を考える」『考古学フォーラム』４　考古学フォーラム

永井遺跡　1973　『永井遺跡発掘調査報告』　四日市市教育委員会

納所遺跡　1980　『納所遺跡－遺構と遺物－』　三重県教育委員会

東庄内Ｂ遺跡　1970　「東庄内Ｂ遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告書』

－尾張－

阿弥陀寺遺跡　1990　『阿弥陀寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集　(財)愛知県埋蔵文化財センター

－若狭－

吉河遺跡　1986　『吉河遺跡発掘調査概報』　福井県教育庁埋蔵文化財センター